

台北研修旅行を振り返って



台北 研修旅行を振り返って

1月9日から3泊4日、共生会海外職員研修旅行の第二班の一員として台北に行っていました。私たち第二班は、参加者15名の全員が女性職員。仙台空港までのバスの中、さっそく台北についての情報交換で会話が弾み、共生会女子会が始まりました。

当日は夜9時過ぎにホテルに到着。ホテルに来てくれていた現地のグループ会社の「葉さん」が、夜市に行きたい人は20分後に集まると声をかけてくださったところ、機内での夕食から時間も経ち

小腹の空いていた15人全員が参加。葉さんは「えー、全員！」と驚きながらも、15人座れるテーブルも確保してくれました。葉さんの後をついて夜市の屋台を回り、現地の方たちがチロチロと注目する中、麺からスイーツまでいろいろ買ってテーブルに運び、みんなで回して味見しました。「これはいける！」というものから、「うーん、どうだろ!？」というものまで台湾の味を満喫。次の日からの小籠包、台湾料理など大変おいしかったですが、夜市で買って食べるというのは注文から勇気がいるので自分たちだけでは食べられなかったかも。葉さんに感謝です。

2日めに研修先の新光呉火獅記念病院を訪問しました。新光呉火獅記念病院はベッド数1000床、平均在院日数6.7日という急性期病院。当日は企画室の陳主任はじめ看護師長などが対応して下さい、まず、DVDによるグループ全体の紹介から始まりました。新光グループは金融サービス、セキュリティ、消費サービス、医療サービスを台湾で展開しています。グループの利益を医療を通して社会に貢献することを目的としているという理念の紹介がありました。実際に案内していただいたのは、

人間ドックを行う健康管理センターと健康検査センターです。90人の検診を頭からつま先まで全身1日で行っているとのことでしたが、バーコードを患者に貼って、各検査はバーコードをチェックして行い、各検査が即座に集約されるようになっており、「早く、安全に、正確に」行うためのシステム作りができていました。また、ゆったりした気持ちで検診が受けられるように陽光の入るデザインもされていました。見学の後、私どもから何点が質問をさせていただいたところ、訪問看護部門、退院調整チーム、転送チームなどが日本と同じように存在していました。国民保険制度も日本と同じで3割負担が基本(ちなみに保険証は顔写真付き)。高額療養費制度で1カ月の自己負担は4万円程度に抑えられているということです。一昨年の研修旅行でソウルの病院でも感じたのですが、治療内容が最前線で確実、安全なのが前提ですが、さらに患者の居心地のよさや便利さも日本の病院よりも大事にしているように感じました。



3日めは台北から東へバスで1時間、100年前に炭鉱で栄えた「十分」という街へ行ってきました。鉄道の十分駅のそばの線路の両脇に商店が並んでいて、その線路で大きな赤いランタン(140cmくらい)に筆で願いごとを書いて空に上げていきます(気球の原理?)。私たちがランタンを交代であげている間にも、3回電車が来てランタン上げを中止して脇によりました。1回目に線路の中に入れて電車が来ると言われた時は、本当にびっくりしてパニックになりそうでした!青い空に吸い込まれて行く赤いランタンの美しさが今も眩に残ります。

4日目の最終日は、朝5時に起きて日本への帰路に向かいました。仙台空港は快晴だったのですが、盛岡に近づきにつれ積雪、吹雪。気温17℃の世界から、氷点下の世界へ移動。日常の世界に戻ってきたことをつきつけられ、私たちの女子会は終わりました。

台北でも晩婚化、少子化、離婚の増加などの現象が起こっているというガイドの丁さんからの説明がありました。それはいずれ、日本と同じ高齢化社会の問題へと続いて行くのでしょう。医療と介護システムの充実、どこの国でも国民の幸福のために大切なことです。海外で病院見学をしたことで、自分の仕事の責任をマクロな視線で自覚できたように思います。

最後に、地下鉄の駅で地図を見ていた私たちに声をかけてくれ道を教えてくれた若い女性、散歩していたホテル近くのお寺で、声をかけてくれてお参りの仕方を教えてくれた中年の女性の方、片言の英語と日本語を混ぜて私たちと会話して大笑いしたタクシーの運転手さん、自由行動でのこの方たちとの心温まる出合いをきっと忘れません。 謝謝。